

# 「文壇の思い出」より

## 重慶～上海



中華民国時代の上海

(1943年の秋、趙清閣は北培から重慶へ移った。)

唐性天①が『弾花』の続刊を拒否したあと、私は彼が編集していた『弾花文芸叢書』の編集を引き継ぐことになった。唐性天が現実的な利益を重んじる人間だということは知っていたが、再び彼の協力を得ることにした。私は『弾花文叢』と名前を変え、10冊を出すことにし、作家のリストを作った。共産党の作家や無党派の作家がいたが国民党の作家はいなかった。これは定期刊行物ではなく、作家の生活を助けるためのものだったからだ。

作家たちの多くは文章を書くことで生活していた。戦争中は出版事業が困難で、先輩作家が私に「刊行物を編んで叢書を出すのは、文芸の事業にとっても作家たちのためにもよい事だ」と言ったことがある。

1943年に成都の中西書局が『中西文芸叢書』の編集を依頼してきた。中西書局は私営の出版社で社長は李旭昇だった。彼らは成都文協分会に『文芸創作叢書』と『翻訳叢書』の編集を依頼していて、成都文協分会とは密接なつながりがあった。

それ以後、私は重慶黄河出版社の編集主幹として『黄河文芸叢書』で、陽翰笙②の戯曲『槿花之歌(むくげの花)』、梁実秋③が翻訳したエミリー・ブロンテの『咆哮山庄(嵐が丘)』など数冊を出したが、それだけで終わった。というのは日本が投降して私が重慶を離れたからである。

①唐性天……華中図書会社の経営者。自身は北京大学でドイツ語を学びドイツ文学の翻訳本も出版している。華中図書会社は武漢の大手出版社で抗日戦争時には数種の文芸誌を発行していた。

②陽翰笙(1902-1993)……脚本家、映画製作者。抗日戦中は周恩来の片腕として働いた。

③梁実秋(1903-1987)……教育者、翻訳家、辞書編纂者。1949年に台湾に移住した。



抗日戦に勝利したあと、1945年10月、上海の『神州日報④』編集長謝東平から、文芸欄の編集をやらないかという話があった。そこで私は10年近く離れていた上海の黄浦江⑤に戻った。『神州日報』は楊虎⑥が個人で発行していた新聞で、私は彼を知らないし会ったこともない。ただ謝東平は国民党の左翼的人物で社会科学の研究をしていて、重慶の民衆教育館で数か月一緒に働いた同僚だった。『神州日報』の社説の大部分は彼が書き、常に蒋介石の政権に対して鋭い批判をしていた。

謝東平は文芸欄にも、彼と同調する姿勢を求め、私はそれを承諾した。私は「文芸欄は大衆の代弁をし、民主的で自由に大衆が心に思っていることを言わなければいけない」とはっきりと言ったことを覚えている。

④神州日報……辛亥革命前 1907 年 4 月に上海で私人により創刊された新聞。孫文の支持を得たあと革命の思想宣伝の記事が増え愛国者に受け入れられた。中華民国成立後に袁世凱に買収されその後何度か社主が変わり、1946 年 12 月 15 日に廃刊となった。

⑤黄浦江は淀山湖を水源とし上海市街地の下流で長江に合流する川。この黄浦江下流域の兩岸地区が黄浦江(地区)あるいは「申江」と呼ばれている。

⑥楊虎 (1889 - 1966) ……中華民国・中華人民共和国の軍人・政治家。1946 年 7 月からは陸軍中將の任にあった。

『原野』という文芸欄の名は、この小さな場所が大自然の平原のように作家がペンを走らせる場である、ということの意味している。謝東平はこれに賛成したが、新聞社のその他の人が気に入るかどうかわからない、私は考えなかった。1946 年元旦から私は『原野』の編集主幹になった。

当時はまさに国民党の狂気の“劫収（無理やり収めさせること）”が上海の民衆の生活をおびやかしていた。『原野』ではまずこの状況を暴露して批判した。（私も“劫収”のおかげで上海では日本人が住んでいた家に住んでいたのではあるが、そのあとは中国人の大家と合法的な賃貸借契約をして家賃をきちんと支払った。）

『原野』は現実を正視して言うべきことは言う姿勢を打ち出したので、作家達の熱烈な支持を得た。しかし、吉事は長くは続かず、私はまた当局から警告を受けた。それで一か月後「開口大吉」と題した次のような一文を書いた。

「太陽暦の年にうかつにも耳障りなことを言ったために、いろいろ考えて頭がくらくらし、あやうくトラックに頭をぶつけるところだった！ これを教訓とし祭灶節の日（旧暦 12 月 23 日から 1 月 15 日まで）からは口に封印紙を貼り、旧暦の年の間はほとんど話をしないようにしようと決めた。……しかし今日、一月五日は北方の習慣では“門檻紙”を燃やして自由に動くことができる。すべての禁止から解き放たれ、口の封印紙をはがし、ペンを取って縁起のいいことを書こう。」

この文章を発表してから十日も経たないうちに、私は再び座礁した。「上元節夢話」と題した一文が騒動を引き起こしたのだ。

「私は旧社会を焼き壊す夢を見ている。なぜなら、この世は人の世ではなくヤマイヌとオオカミの世界だからだ。ヤマイヌとオオカミだけが生きられる。一人の善良な『人間』は立てる場所がなくなると生きられない。だから私はこの不平等なヤマイヌとオオカミの世界を焼き壊したいと思っているのだ」

これは厳しい状況を作り出しただけでなく、大いに政府を怒らせた。すぐに謝東平が『神州日報』の人事改変が行われることになったと通知してきて、彼と私は停職処分となった。私はこのような目に遭うのには慣れていて、2月まで仕事をして『神州日報』から離れた。これ以来、私はもう編集の仕事をしなくなった。



1947年に文芸誌『月刊文潮』⑦の編集委員会の委員になったが、これは『女子月刊』のときと同じで、原稿を選び作家の紹介文を書くだけだった編集主幹は私の学友楊郁文の夫で、国民党の進歩的文人張契渠だった。『文潮』は中立性を保っていたので編集委員には民主的な思想を持つ馮沅君、趙景深、李長之、洪深、羅洪⑧などがいた。

1946年からずっと私は書くことを専業としたが、少しも業績がないのが恥ずかしい。ただむだに筆で暮らしをたててきた五十年。むだにたくさんの血と汗を流した！

まさに杜甫のこの二句の詩のようである。「文章千古事，有愧百年身！」⑥

1981年2月10日 明け方

④『文潮』は1946年5月に創刊され、1949年1月の第6号で休刊となった。

⑤馮沅君（1900－1974）……河南省出身。女性作家、古典文学史家。元山東大学教授。

●趙景深（1902－1985）……四川省出身。作家、翻訳家、出版人。1930年から1951年まで北新書局の総編集長を務め、復旦大学昆曲社を創設した。

李長之（1910－1978）……山東省出身。作家、文学評論家、文学史家。1936年に出版された『魯迅批判』で、「魯迅は思想家にあらずして戦士、詩人である」と書き反響を巻き起こした。

●洪深（1894－1955）：劇作家、演出家。ハーバード大学などで作劇、演出を学び、中国の演劇の水準を高めた功労者。

●羅洪（1910－201？）……上海市出身。高校教師をしながら創作活動を開始。同郷の作家・翻訳家の朱雯（1911－1994。作家、翻訳家）と結婚後は共に文芸誌の編集や創作活動に従事した。

⑥杜甫のもともとの詩は「文章千古事，得失寸心知」で、「文章は長く伝わるものであり、文章を書くことの損得、苦楽を知るのは作者のみである」という意味。趙清閣は「有愧百年身（恥が百年間続く）」と書き換えている。

□□□□□